

6月下旬、技術開発に協力したP T S社と業務提携した。種苗の増殖はタイの同社に委託することで、生産コストを大幅に抑えることができる。すでに試験的に新しい種苗を導入し、5年後の23年には現在のほぼ倍となる150トンのニンニクが収穫できる見込み。

十勝の気候風土に適した優れた個体を選抜・育種しながら、将来的にはオリジナル品種を開発する考えだ。串田組合長は「種子をしっかり押さえることは最大の武器になる。ニンニクのブランド化をさらに進め、組合員の所得向上に寄与したい」と話している。

畑に「下町ロケット」 世界最大？無人トラクターで描く

2018年11月23日

T B S系で放送中のドラマ「下町ロケット」を題材にした巨大無人トラクターアートが、十勝で制作された。約8ヘクタールの畑に、主演の阿部寛さんの姿と「日曜劇場 下町ロケット」の文字を描いた。



十勝の畑に描かれた無人トラクターアート
(T B S提供)

ドラマでは、阿部さん演じる佃航平の同級生として、北海道農業大学教授で無人農業ロボットを研究する野木博文（森崎博之さん）が登場。これに合わせ、「世界最大」（T B S）の無人トラクターアートを制作した。今月上旬、自動運転の無人トラクター2台が約12時間かけて、東京ドーム1.6個分の畑にアートを完成させた。ドラマを監修する北海道大学農学研究院ピークルロボティクス研究室の野口伸教授が協力した。

新型トラクターを制御 作業機から遠隔で

2018年11月27日

芽室のフクザワ・オーダー農機 とかち財団と共同で

農機具開発のフクザワ・オーダー農機（芽室、福澤剛志代表）はとかち財団（長澤秀行理事長）と共同で、農作物の収穫などに使う作業機に乗りながらトラクターを遠隔制御できる装置を開発した。農機大手ヤンマー（大阪）の新型トラクターに対応し、この装置でトラクターの車速を確認しながら速度を変えたり、緊急停止させたりする。農作業を効率化し、事故防止にも役立つとみている。



作業機に取り付けるトラクター制御装置と
福澤代表

ヤンマーアグリジャパン北海道支社（江別市）が26、27日に開いた十勝合同展示会で初披露した。新装置はトラクターがけん引する作業機に取り付ける。

作業機側からトラクターを動かす装置は以前にもあったが、ヤンマーの新型「Y Tシリーズ」は高度な電子技術が盛り込まれ、従来の装置では遠隔で制御するのが難しかった。今回の装置はY Tシリーズに初めて対応したものとなる。

トラクターの車速をパネル表示できるのも特徴。速度に関する情報をトラクター側から読み取り、装置に表示する仕組みづくりは、とかち財団が協力した。

ジャガイモなどの収穫作業は通常、トラクターの運転と作業機の操作に最低2人は必要。ただ走行中はエンジン音などで互いの声が聞き取りづらく、トラクターと作業機の間を行き来する中で事故が発生するケースが少なくなかった。

新装置によってトラクター運転者の労力が減り、作業機に乗る生産者の事故リスクも軽減できる。販売予約の受け付けを開始し、価格は税別60万円前後。ヤンマーが販売元となる。

フクザワ・オーダー農機は生産者が楽な姿勢で作業できるナガイモ植え付け機も開発し、2017年度に機械振興協会（東京）の「機械振興協会会長賞」に選ばれている。